



AUE News



2011年3月15日

第 12 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500



目 次

● 行事予定(3月16-31日)

● トピックス

- ・ JICA国別研修会
- ・ 第2回アカデミックカフェ
- ・ 労働安全衛生に関する係長研修
- ・ 訪問科学実験シンポジウム
- ・ 混声合唱団定期演奏会
- ・ 管弦楽団定期演奏会
- ・ 天文台一般公開
- ・ 2011 教科開発学研究発表会
- ・ 愛知教員養成コンソーシアム連絡協議会
- ・ 愛知県総合教育センターと協定締結
- ・ 前期日程合格発表

- ・ 松田学長が三河安城ロータリークラブで卓話
- ・ トヨタ系企業と連携協議意見交換会
- ・ 後期日程試験
- ・ 教育臨床センターが公開シンポジウム
- ・ 吹奏楽団定期演奏会
- ・ 入学手続き始まる
- ・ 理科実験プレ教員セミナー
- 愛教人インタビュー
- ・ 「FC刈谷」に入団した権部洋平さん
- お知らせ・報告・投稿
- ・ 「発明・工夫作品コンテスト」で特別賞受賞
- ・ 大学の案内看板完成
- ・ 大西議員が本学を例に国会質問
- ・ 展覧会など開催案内

行事予定(3月16-31日)

- 16日(水) 教育創造開発機構委員会 (9:30～ 第五会議室)
教員人事委員会 (13:30～ 第五会議室)
財務委員会 (15:30～ 第五会議室)
- 18日(金) 教職員会議 (13:00～ 第一会議室)
教授会 (13:45～ 第一会議室)
- 22日(火) 代議員会 (9:00～ 第五会議室)
役員会 (13:00～ 学長室)
- 23日(水) 卒業式 (10:30～ 講堂)
- 24日(木) 大学院修了式 (18:30～ 第五会議室)
- 25日(金) 永年勤続表彰 (11:30～ 第五会議室)

トピックス

JICA国別研修(2/21-3/4)

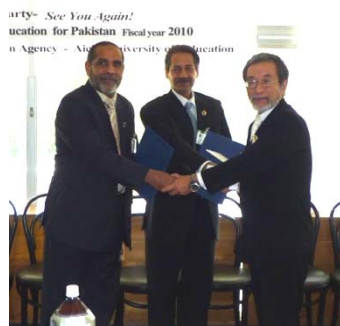


パキスタンから国際協力機構(JICA)研修員2人を迎えて、国別の研修「パキスタン産業技術教育」コースが本学との連携により、2月21日(月)～3月4日(金)に実施された。

同研修は、技術教育講座の宮川秀俊教授が研修機関(本学)の担当代表を務めて実施しており、今年で3年目。

研修では、学内外の専門家による講

義，トヨタ自動車やデンソー，トーエネック，アイシン精機，愛知県立岡崎工業高等学校など，“ものづくり”で有名な愛知県内の企業や学校の視察と共に，東京への県外研修も実施された。東京では，3泊4日の日程で，TEPIA（機械産業記念館），大田区工場，JICA 本部，東京都立産業技術高等専門学校，文部科学省を訪れて，専門家による講義の受講と施設視察を行った。また，現在建設中のスカイツリーの工事現場を間近で見学するなど，研修員にとっては多面的に日本の産業技術教育の検討を深める貴重な機会となった。



研修の最終日には，研修員と JICA 職員，本学役員及び研修関係者が出席して，閉講式を兼ねた歓送会が本学で催された。松田正久本学学長が「今回の研修成果を活かして，自国の発展は勿論，日本とパキスタンとの関係強化にも貢献していただきたい」と挨拶すると，研修員らは，研修に関わる本学と JICA の支援について深い感謝の意を表すと共に，「研修で学んだ日本の知識や技術を，ぜひ自国の産業技術教育分野に取り入れていきたい」と強い決意を述べた。

（教育創造開発機構運営課 国際交流担当 宮内春菜）

第 2 回アカデミックカフェ(3/1)

本学の「第 2 回アカデミックカフェ」が 3 月 1 日（水）午後 5 時過ぎから第五会議室で開催された。前田勉教授（社会科教育）が講師を務め「江戸時代の読書討論会」について熱弁を振るった。身振り，手振りを交えた「白熱教室」で，学生，教職員や一般市民ら約 40 人が参加し，コーヒーなどを飲みながら熱心に耳を傾けた。

冒頭，折出健二理事があいさつし，前田教授が本学教員として 2 人目の「角川源義賞」受賞者となったことを紹介。教え子の院生から受賞を祝う花束が贈られ，講演に移った。

前田教授は，百姓・町人はもとより，武士内部でも上士と下士の差別があった江戸時代の厳しい身分制度のもとで，会読という読書会，車座での討論会が行われ，横のフラットな人間関係が培われていった様子を説明。当時の学習方法は素読・講釈・会読の三つがあるが，複数の人が定期的に集まり討



論しながらテキストを読む会読は，中国などにはない方法だったという。教授は「虚心に討論すべきで，人を批判するのは見苦しい」などとした会読の注意書きの資料を示しながら，会読社中が結社化し，単なる読書から政治議論の場に発展していった江戸後期の思想史にも触れて，「タテの階層社会の中で，お互いが対等で自由な意見を披露し，横のつながりをつくっていく大きな拠点が教育の場だったことに注目した」と述べた。

会場からは会読における評価方法，現代の学歴社会解決のヒント，リーダー像などについて質問が出され，教授は「身分社会を変えてゆく場が江戸後期の学校であった。今後，大学でも，学ぶ方法次第で，人と人との新しいつながりをつくっていく可能性はあると思う」と語り，大きな拍手を浴びて 1 時間余の講演を終えた。



労働安全衛生に関する係長研修(3/3, 8, 14)

本学の労働安全に関する係長研修が 3 月 3 日（木）、8 日（火）、14 日（月）の午前 11 時から、第五会議室で行われた。



本学安全衛生委員会が主催。10 年後、20 年後に本学を担う中堅職員の係長を対象に、愛教大を健康・安全・快適な大学にし、係長自身も健康・安全・快適に働けるようにするための新たな一歩を進めるのを目的に実施され、3 日間で計 51 人が参加した。

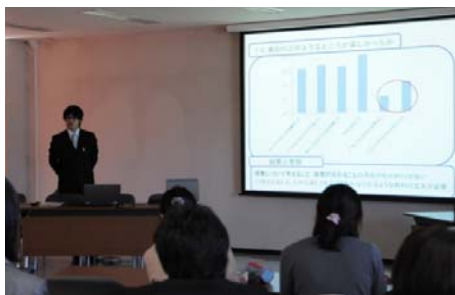
講師は産業医で保健環境センターの久永直見教授。労働時間増加や非常勤職員増加で厳しくなる日本の労働事情、本学における安全衛生の課題、健康安全

快適な大学づくりについて約 1 時間講演した。久永教授は「今はあらゆる職場が労働安全問題を抱えている。疲労・ストレスを軽減するには、お互いに支えあい、仕事の量を平均化することが必要」などと述べ、労働時間・睡眠時間と免疫機能の関係について、調査結果を示して説明。事務作業の際の椅子や机の高さ、照明など人間工学的な改善などの事例を挙げて、すぐに取り組める方法を紹介した。

訪問科学実験シンポジウム(3/5)

本学の学生が小中学校などに出向いて、子どもたちと一緒に科学実験を楽しむ「訪問科学実験」の活動報告などを行う「訪問科学実験シンポジウム」が 3 月 5 日（土）午前 10 時から第五会議室で行われ、学生や教員、実験訪問先の関係者など約 60 人が参加した。

訪問科学実験は、1997 年度に文部省（当時）主導のフレンドシップ事業として大学の授業の一環として活動を開始。カリキュラム改訂のため、2002 年度からは授業ではなく、学生の自主性・主体性が尊重された全学的な活動として行われ、2009 年度以降は「特別教育研究・教育改革」の枠組みの中で、「理科実験・ものづくりができる教員」を目指して、発展的に活動が継続されており、2010 年度は 185 人の学生が活動に登録している。



シンポジウムの冒頭、松田正久学長が「大学として今年度は理科実験に予算をとり、研究員も採用。理科嫌いでない先生たちを育てるために積極的に取り組んできました」などとあいさつし、本学の科学・ものづくり教育への姿勢を話した。

続いて、訪問科学実験学生執行部から、副部長の武山舞花さん（中等・理科専攻 4 年）、加藤啓介さん（教育学・院 3 年）さんが、今年度の活動を報告。29 件の実践、実験テーマ、実践先へのアンケート調査結果などを発表した。

教材発表では、今年度に新たに開発した教材を紹介。「偏光を利用した 3D 体験」「体のかさ（体積）測定」「うがい薬の意外な秘密」「液体酸素」の実験を実演すると、参加者も身を乗り出して見学、開発の過程や仕組みについて質問が飛び交った。

その後、訪問先の学校の教員や父兄らが、実験の様様や子どもたちへの影響を紹介。東栄町社会福祉協議会の岸谷万左江さんは「町には科学館や博物館など、子どもたちが遠足に行くような施設がないし、若い人を見ることもほとんどない。教室を開いていただくことは、いろんなメリットがありました」などと報告した。

最後は、来年度学生執行部代表の中原一輝さん（中等・理科専攻 3 年）があいさつ。「今日のご意見を今後の活動に生かしていきます」と抱負を語り、シンポジウムを締めくくった。



混声合唱団定期演奏会(3/5)

本学混声合唱団の定期演奏会が 3 月 5 日（土）午後 5 時 30 分から名古屋市中川区の名古屋市中川文化小劇場で行われた。



ングなども盛り込んだコメディタッチの演出に客席から笑いや手拍子が起こり、盛況だった。最後は客演指揮者によるステージ。本学 OB で名古屋市立北高等学校教諭の友森美文さんの指揮、同じく OG で愛知県立知立高校講師の平松八江子さんのピアノ演奏でドイツ・ロマン派の作曲家、ラインベルガー作「Messe in f op. 159」を団員 60 人が荘厳で美しいハーモニーをホールいっぱいに響かせた。

ステージ上で団長の栗本亜也子さんが「一つの舞台を作り上げるのに多くの仲間に支えられました。先生、OB、OG、他校の合唱団、家族に心よりお礼申しあげます」とあいさつして、締めくくった。

合唱団は積極的なメンバー勧誘の成果もあって、この 4 年間で団員が倍増。昨年までは終演後にロビーコールを行っていたが、今年はロビーに並びきれないためにステージコールとして、来場者への感謝を込めてアンコール曲を披露した。



管弦楽団定期演奏会(3/5)

本学管弦楽団の第 74 回定期演奏会が 3 月 5 日（土）、名古屋市東区の愛知県芸術劇場コンサートホールで開催された。午後 6 時半過ぎから始まった演奏会では、NHK 交響楽団ヴァイオリン奏者の山田慶一氏が客員指揮を務め、約 770 人が本格的な演奏に聞き入った。



J・シベリウスの交響詩「フィンランディア」作品 26、E・グリーク「ペールギュント」第 1 組曲・第 2 組曲の抜粋を演奏した。「ペールギュント」では時に荘厳に、さわやかに、妖艶に舞台を見るような演奏に聴衆の中には、物語の世界に引き込まれるように目をつむり、じっと耳を傾ける人の姿も見られた。

休憩の後、シベリウスの交響曲第 2 番ニ長調作品 43 が演奏され、指揮者の情熱的な動きに導かれるようにそれぞれの楽器の音色が調和して、クライマックスへ。学生の熱演に会場からは大きな拍手が送られ、アンコール曲が演奏され、観客も管弦楽を堪能した様子だった。

天文台一般公開(3/5)



本学天文台の「第 61 回一般公開」が 3 月 5 日（土）午後 6 時から、自然科学棟で開催された。

今回は、午後 6 時からのミニ講座では学生が講師を務めた。小林彩さん（自然科学コース宇宙・物質科専攻 4 年）は「私の卒業研究から一リング銀河の形成シミュレーション」と題して、卒業研究で行ったリング銀河の形成シミュレーションについて講演。銀河の分類、その分類に入らない



特異銀河を、鮮明な画像を交えて解説した。次いで、安藤徹さん（大学院教育学研究科理科教育専攻2年）は「私の修士論文から—宇宙ジェットと衝撃波—」のテーマで、宇宙ジェットとはどのようなものか、その代表的な原始星スケールなどについて解説。この日は58人の一般参加者が、壮大な宇宙の仕組みに耳を傾けた。

午後7時からほぼ快晴状態で展望会が実施され、84人が詰めかけた。40cm望遠鏡ではオリオン大星雲M42をはじめ、小さな台形をつくるトラペジウムとその周りに広がる星雲の様子を、小型望遠鏡ではスバルや地平線すれすれに見えるカノープスを、それぞれ観察した。

また、天文愛好サークル「CORE」の有志によるプラネタリウム投影もあり、来場者に好評だった。



2011 教科開発学研究発表会(3/6)

本学では、静岡大学との共同博士課程による後期3年のみの博士課程「共同教科開発学専攻」の設置を構想し、準備を重ねております。この「教科開発学」専攻は、教育環境学と教科学を統合した新しい研究分野を構想しており、従来から展開されてきた「教科内容学、教科教育学ならびに教育基礎科学」の研究も含め、広く教科に関する基礎的・応用的研究に関するものです。

3月6日（日）午後1時から本学第一会議室、第五会議室において研究交流会が開催されました。本学や静岡大学等から40名を超す方々が参加され、熱心に議論されました。発表に先立ち、本研究会大会準備委員長の折出健二理事より「発表者の方々から貴重な研究的な問題提起をいただき、これをめぐる協議を通じて、教科開発学研究が立ち上がる大事な日です。その成果が教員養成系の修士課程を踏まえつつ新たな博士課程の輪郭を浮き彫りにし、今後の展開に資するものとなることを切に願っております」とする旨の挨拶がなされました。

研究会は、二つの分科会からなり、教育環境学分科会で8件、教科学分科会で8件の研究が発表され、熱心に協議されました。発表は、愛知教育大学と静岡大学の教員の研究が5件、教員と大学院生との共同研究が8件、大学院修了生と教員の共同研究が1件、大学院生の研究が1件、愛知県内の大学から1件の発表がありました。静岡大学と本学の関係者が一堂に会し、研究交流を深めるのは初めてのことであり、この熱気ある討議は共同博士課程設置構想の専攻科目である「教科開発学セミナー」を彷彿させるものでした。

本研究会の発表論文集（A4版、総頁86頁）に余部があり、希望者には無料で配布いたします。共同博士課程設置準備室（総務課・繁野：TEL0566(26)2115・FAX0566(26)2110・E-mail：syomu@aeu.ac.jp）にお申し出下さい。

（学長補佐 共同博士課程設置担当 都築繁幸教授）

愛知教員養成コンソーシアム連絡協議会(3/7)

愛知県内で小中学校の教員養成を行っている大学、学部や小中学校の教員免許の課程認定を計画している大学などの連携を図る「第4回愛知教員養成コンソーシアム連絡協議会」が3月7日（月）、本学で開催された。本年1月に中央教育審議会・教員の資質能力向上特別部会の審議経過報告があり、教員養成に関する審議内容の分析などのため本学が関係大学に呼び掛けた。講師に文部科学省大臣官房教育改革調整官の日向信和氏らを招いた。

この日は県内26大学の教員、事務職員ら計42人が出席し、本学理事、教職員を合わせて70人以上が出席した。松田正久本学学長が「年度内に開催したいと考え、お忙しい中、お集まりいただきました。教員養成をめぐる動きについて確認したい」とあいさつ。協議では、愛知学長懇話会のもとにある愛知教員養成コンソーシアムの会長を松田学長が、副会長を愛知県立大学学長と至学館大学学長



がそれぞれ引き続いて務めることが了承された。

講演に移り、日向氏が「教員の資質向上能力向上方策の総合的見直しについて」をテーマに約50分講演。平成18年の中教審答申を踏まえて、教員の修士レベル化をはじめとする今回の「教員の質向上特別部会」審議経過報告の全体像を説明。教員養成、採用、研修の一体的検討が求められており、「教員が教職生活全体を通じて資質能力を高めていくことを支援するシステムづくりが必要で、校長のリーダーシップ・マネジメント能力がこれまで以上に求められている」とした。また、日向氏は教員免許取得者と教員採用者数が乖離している現状、所有免許状別教員構成、養成機関別免許取得者数、免許更新制、教員研修の実施体系、教職大学院など多岐にわたる課題のデータを分析。「これらの報告を土台にしてどう制度設計していくのか、今後、厳しい激論が交わされながら進められる」と述べた。

会場からは「今後の日程は」「教育実習の長期化には受け入れ側の課題もある」「教員の需給についての議論はあったのか」などの質問が出され、日向氏は「日程は何ともいえない。実習の議論はそこまで深まっていない。需給調整も明確にはしていない」などと答えた。

この後、愛知県教育委員会教職員課の伊藤智祥主査、名古屋市教育委員会教職員課の西淵茂男課長がそれぞれ県、市の教員採用について話した。伊藤主査は教員採用試験で県内の受験者が増



加傾向にあるとした上で「採用数はこの5年、ほぼ同じ数だが、小学校は減って中学校は少し増え、高校は増えている。今後も大量に退職していくので後5年も大きな変化はないと思われる。県教委としては、豊かな専門的知識を持ち、明るくて心身ともに健康な人を求めています」などと述べた。また、西淵課長は「メンタル面でたくましい人材を求めている。募集数は2014年まで教員採用数は400人程度

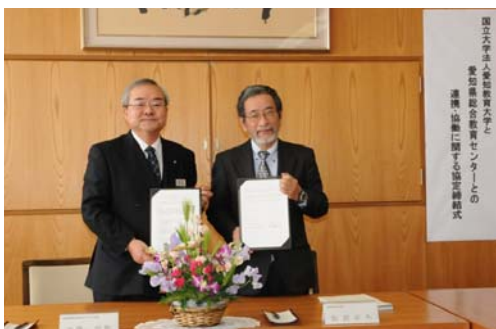
で推移していく見通しだが、少人数学級や教員の定年延長などの動向次第で大きく変わる。大学院進学による特別選考は来年度はやりたいと考えている」などと話した。最後に、松田学長が「今後もこのようなシンポジウム開催したい」と述べて約2時間の会を終了した。

愛知県総合教育センターと協定締結(3/8)

本学と愛知県総合教育センター（東郷町）との連携・協働に関する協定を結ぶ締結式が3月8日（火）午前10時から第三会議室で行われた。

この協定は、教員の資質向上が叫ばれる中、多様な教員養成プログラムを通して優れた教員の養成を目指す本学と、県内教育の振興を図るため研修事業・研究調査事業を展開する同センターが相互に連携・協働し、県内教育の一層の充実を図るのが目的。

締結式には、本学から松田正久学長、横地正喜理事（連携担当）、村松常司理事（学生担当）



ら5人が、同センターからは加藤滋伸所長、安藤誠研修部長、水野達彦基本研修室長が出席。出席者や協定内容が紹介され、松田学長、加藤所長が協定書に署名し、書面を取り交わした。

松田学長は「質の高い教員養成をセンターの協力をお借りして進めてまいりたいと思います」とあいさつ。加藤所長も「教員養成の中核である愛教大との協定は、これからの教育において画期的で意義深いこと。センターとしても役立てることを積極的にしたい」と述べ、

松田学長と握手をした。

今後は、それぞれの研修や研究に互いの、教員・職員を派遣、施設設備などの貸与に積極的に便宜を図ることになる。

前期日程合格発表(3/8)

前期日程入学試験の合格者の発表が3月8日（木）午後1時から、講堂ロビーで行われた。

入試課の職員が、合格者668人の受験番号を張り出した掲示板を公開すると、待ち構えた受験



や保護者が掲示板をじっと見つめ、番号を探した。受験番号を見つけると「おめでとう！」と母娘で抱き合ったり、「あった～！」と思わず飛び上がって喜ぶグループの歓声が響いた。また、掲示板の番号を携帯電話のカメラで記念撮影し、その場で家族や友人に電話やメールをする受験生の姿も、あちこちで見られた。

午後5時まで講堂で行われた後は、本部棟前の掲示板に移して公開。また、大学ホームページでも午後1時過ぎには合

格者の受験番号が掲載された。

入試課職員は「昨年より受験生が多かっただけに、見に来る人も例年より多い」と、合格を喜ぶ様子を見守っていた。

掲示板の横では、生協による「一人暮らし相談コーナー」も設置され、合格した受験生と保護者が早速、新生活の準備。講堂前では、クラブやサークルのユニフォームを着た学生たちが合格者を見つけては声を掛け、勧誘に繰り出していた。

松田学長が三河安城ロータリークラブで卓話(3/9)



本学の松田正久学長が三河安城ロータリークラブの例会に招かれ、3月9日(水)午後1時30分から卓話講師を務めた。

会場の安城市のグランドティアラ安城では同クラブの阿部光廣会長、安藤一高副会長らが松田学長を出迎え、例会セレモニー、食事について、卓話が始まった。

講演のテーマは「愛知教育大学と地域貢献」。本学の歴史や規模、法人化後の独立採算制での運営などの概要をはじめ、安城市との地域連携の実績や卒業生の就職、1月に締結した包括協定など、安城市と本学との幅広い結び付きを説明。併せて、留学生招聘や優秀学生・クラブの顕彰などに活用される本学教育研究基金への寄付も要請した。この日は53人のメンバーが出席し、熱心に講演に耳を傾けた。

終演後には「優秀な学生がいたら、わが社でも採用したい」「今後、愛教大との連携ができれば」と松田学長に声を掛け、名刺を交換するメンバーの姿も見られた。



トヨタ系企業と連携協議意見交換会(3/10)

本学と地元のトヨタ系企業が社会貢献などの連携を模索するための意見交換会が、3月10日(木)午後3時から、第三会議室で開かれた。



本学からは松田正久学長をはじめ、役員、学長補佐や学系長らが、トヨタ系企業からはトヨタ紡織、トヨタ車体、豊田自動織機、デンソー、アイシン精機の社会貢献部門の担当者が出席。

冒頭、松田学長は「どういう連携が可能か、忌憚のないご意見を聞かせていただきたい。今後、継続的に地元のトヨタ系の皆さんと取り組んでければ」などとあいさ

つ。トヨタ系企業との橋渡し役を務めた澤崎忠昭監事も「金銭面だけでなく、さまざまなコラボレーションにつながれば」と期待した。

この後、各社の社会貢献活動を説明し、中には既に本学の学生がボランティア参加している衣料品回収や祭りの例も紹介。本学側も「訪問科学実験」「科学ものづくりフェスタ」、大学公開講座、国際交流などの地域貢献の実績を紹介した。また、大学の施設を知ってもらおうと、天文台や図書館などの見学も行なわれた。



今後は 2、3 カ月に一度程度の意見交換をしながら、具体的な連携策を探ることを合意して、この日の意見交換会は終了した。

後期日程試験(3/12)



平成 23 年度入学の後期日程試験が 3 月 12 日（土）に実施された。

試験開始の午前 9 時 30 分を前に、8 時ごろから受験生が次々に訪れ、受験票を会場入り口の職員に提示して、それぞれの試験会場となった教室に向かった。

前日午後、東北地方の太平洋沖で発生した地震の影響が心配されたため、本学 HP で試験を受けられない受験生に呼び掛ける緊急措置をとるなど対応。関東地方から 1 件の連絡が寄せられた以外は、大きな混乱もなく、無事に日程を終えた。

後期日程の志願者は 1988 人で、実際に受験したのは 886 人で、欠席率は 55.4%、倍率は 4.3 倍。合格発表は 24 日（木）に講堂で行われ、合格証が手渡される。

教育臨床センターが公開シンポジウム(3/12)

3 月 12 日（土）に、「第 1 回愛知教育大学教育創造機構 教育臨床総合センター 公開シンポジウム」が、名古屋国際会議場で開催されました。テーマは「現代の子どもや若者の課題とその支援—学校、家庭、社会を射程として—」で、子どもたちへの援助活動に携わる多領域の専門家をシンポジストとして招いた企画となりました。

基調講演として精神科医であり臨床心理学者の滝川一廣先生よりテーマに沿った話題が提供され、その後シンポジストの本間友巳先生（臨床心理学）、春日井敏之先生（臨床教育学）、川北稔先生（臨床社会学）のディスカッションが加わるという内容です。



基調講演では、子どもが抱える普遍的な課題と現代の課題について、歴史的な観点から述べられました。特に子どもたちが抱える現代の課題として、「自分」とは何者かという問いを突きつけられることによる「生きづらさ」をあげられました。この点については、シンポジウムでもシンポジストによって切り口は異なるものの、現代の子どもたちは、昔より我慢が足りないとか怠け者になったのではない、むしろ「昔より穏やかになった、デリケートになった、微妙な対人関係を必死で生き延びている」などの特徴があげられました。またそのような生きづらさを抱える「社会のふところの浅さ」や「社会公共性の衰退」も背景として語られました。

このような現代の状況に対して、既成の価値観によるステレオタイプな「家族モデル」だけでなく多様な家族のモデルを発信することによって、「私でも大丈夫」という社会への所属感を子どもたちが持てるのではないかという具体的な支援の指針が提案されました。あるいは「人に迷惑をかけないで生きたい」という現代の子どもたちに「迷惑かけても OK」という大人たちからの働きかけが重要という見解や、これとは逆に「迷惑をかけたくないという子どもの気持ちを大切に、それを認める」という立場からの意見も出されました。

ほぼ 4 時間に及ぶ会でしたが、提案者とフロアが次第に一体となって、テーマについてそれぞ



れが思索する非常に有意義なシンポジウムでした。事後のアンケートでは、来年も教育臨床に関する同様なテーマで是非シンポジウムを開催してほしいという要望が多かったようです。実はこのシンポジウムに関しては、この前日の震災によって開催が危ぶまれたのですが、参加者一人一人が自らに与えられた日常を大切に生きることからはじめようとの思いを共有する有意

吹奏楽団定期演奏会(3/12)

本学の吹奏楽団による「第 54 回定期演奏会」が 3 月 12 日（土）午後 5 時 30 分から、安城市民会館サルビアホールで開催された。



年に 1 回の定期公演を行っており、卒団演奏も兼ねての演奏会。前日に東北地方で大地震が発生し、午前中のリハーサルでは数回の余震に見舞われながらも、団員たちが心を一つに合わせて、1 年間の練習の成果を発表しようと最後の調整を行った。

冒頭、司会者が「大震災の被災者へお見舞い申し上げます」と述べて、演奏会が始まった。

第 1 部は学生が指揮するステージ。井上卓也さん（初等・音楽選修 3 年）、曾我部暁子さん（中等・音楽専攻 2 年）がそれぞれ正指揮、副指揮を務め、「ナヴァル・ブルー」「SLAVIA」など 3 曲を演奏。第 2 部は企画ステージとして、「大自然のかけ橋へ届け！ 僕らのハーモニー」を感情豊かに演奏。第 3 部のメインステージでは、音楽監督で常任指揮者の小松孝之名古屋芸術大学大学院教授がタクトを振り、交響曲「ローマの松」を披露し、団員たちの熱演に満員の客席から大きな拍手が送られた。

入学手続き始まる(3/13-15)

前期日程の合格者の入学手続きが 3 月 13 日（日）、14 日（月）、本学大学会館で行われた。

開始時刻には合格した受験生と保護者らが受付のカウンターから会館の外まで行列になるなど、初日の午前中に集中。一番乗りは 8 時 15 分に到着したという名古屋市瑞穂区の男子合格者と母親。「どうせ手続きするなら早くと思って」と母親。合格証を手にした受験生も「先生になりたいので、頑張ります」と意気込みを口にした。



館内では、学生支援課の職員などが合格証を確認し、入学手続きの概要を手渡して、入学金や授業料の支払いの説明などにあたった。館周辺では、入学手続きを終えた合格者にクラブやサークルの入部勧誘も行われた。

なお、書類の不備などの場合に限り、15 日は学生支援課で手続きを受け付けた。

理科実験プレ教員セミナー(3/14,15)

教員志望の学生の理科への苦手意識を払しょくするための「理科実験プレ教員セミナー」が 3 月 14 日（月）、15 日（火）に自然科学棟で行われた。

児童・生徒の理科離れのみならず、指導する立場の教員の理科離れのも近年、深刻な問題として大きく取り上げられている中で、本学では小学校教員として知っておかなければならないことに焦点を絞り、実験・観察を中心に実践的な内容のセミナーを開講している。

今回は本年度 4 回目の実施。14 日は午前に生物、午後に物理、15 日は化学と地学の実験講座



が開かれ、それぞれ約 20 人が参加。生物実験講座では「生物の観察・飼育法」を、澤正実教授が指導。1 年から 4 年までの学生が参加し、メダカやカエルの卵の観察、飼育の方法を学んだ後、実際に電子顕微鏡を使って観察に挑んだ。

受講した 4 年生の男子学生は「4 月から教員になるので、理科が苦手な友達を誘って参加しました。大学での授業では各教科の時間が限られるので、こういう機会に

各分野の実験について学べるのは助かります」と話し、熱心に取り組んでいた。

愛教人インタビュー

「FC刈谷」に入団した権部洋平さん



本学の学生でサッカー部に所属の権部（ごんぶ）洋平さん（初等・国語選修2年）がこのほど、刈谷市の市民サッカークラブ「F C 刈谷」に入団した。学生ながらその力が認められ、社会人チームで活躍することになった権部さんに聞いた。

入団した今の気持ちは—

嬉しいです。大学の部活でサッカーをやっていて、昨年12月にF C 刈谷のセレクションを受けました。その後、2回の練習、1月中ごろから1カ月間練習生の期間を経て、2月に入団が決定。監督や見てくれた人が期待してくれたから入団できました。プレッシャーを感じますが、頑張りたいです。

サッカーを始めたきっかけは—

小学3年の時、当初は野球をやりたいかったのですが、小3でできるのはサッカーしかなかったので少年団に入りました。サッカーがやりたくて、ではなかったので、父に練習に連れ出されていました。中学ではクラブチーム、高校では部活でプレー、父はずっと試合に応援に来てくれていました。その三重高校では県大会で準優勝しました。

入団後はどんな生活ですか—

週6日間は練習で、オフは1日だけ。平日は夜7時から、土日は午前、刈谷市総合運動公園などで練習し、帰宅は夜10時、11時。1年の時は寮生活でしたが、2年からは下宿で体調管理に気をつけています。報酬はありませんし、アルバイトはできませんが、サッカーに必要なお金はチームが負担してくれるので、プレーに集中できます。

今季の目標は—

まだ技術的には足りないので、チームに貢献できる選手になること。この1年はチームでできることをしっかりやりたい。

将来の夢は—

教員です。小学生のころから、人にものを教えるのが好きだったので。大学で体育を学ぶことも考えましたが、サッカーは部活でもできると考え、国語選修に進学。自分も勉強と部活の両立に苦労しましたが、サッカーをしているから勉強ができないわけではないことを伝えたい。先生になれたら両方できる子どもたちを応援したいですね。

（インタビュー：法人運営課広報担当 小林則子）



お知らせ・報告・投稿

「発明・工夫作品コンテスト」で特別賞（報告）

大学生を対象にした「発明・工夫作品コンテスト」で、本学で技術を学ぶ戸莉祥崇さん（大学院技術教育専攻2年）、伊藤郁弥さん（中等・技術専攻4年）、岩田卓也さん（同）＝写真左から＝が特別賞に輝いた。



同コンテストは日本産業技術教育学会が主催。発明工夫、教材開発、プログラム、スキルアップなど5部門が設けられている。本学からの応募は3年ぶりで、昨年11月末に応募、結果は1月21日（月）に発表。戸莉さんと伊藤さんチームは発明工夫部門で、岩田さんは教材開発部門で、それぞれ学会長賞に次ぐ特別賞を受賞した。

戸荏さん・伊藤さんの作品は「3WAY ペーパーホルダー」。六角柱の側面からトイレットペーパーを入れ、三つの取り口から用途に応じた取り口を選択してペーパーをとることができる。トイレットペーパーを様々な用途に使えるように工夫し、材料は愛知県足助町の間伐材を用いることで環境教育や地産地消の意義を学習するのを目的に製作。

2 人は「取り口を増やしたり、強度不足で割れた時は、木材の厚さを調整するなど、何度か作り直しました」と完成までの道のりを振り返りながら、「作ったものが評価される機会が少ないので、受賞が自信になりました」（戸荏さん）、「作品が評価されたのは嬉しい」（伊藤さん）と笑顔で語った。

岩田さんの作品は「マイキーボックス」。木製のキーボックスで、扉をあけるとスイッチが ON になり、ボックス内部に仕掛けた回路に電流が流れて、LED が点灯。同時に防犯対策のブザーも鳴るというもの。木材加工に電機や金属加工などを取り入れ、一つの題材でより多くの知識や技術を学ぶことのできる複合教材になっている。

11 月初めから卒業研究も兼ねて、製作。「扉を開けると回路が動く方法を本やネットで情報収集。ある時、冷蔵庫を見てひらめました」と岩田さん。キーボックスの全面を写真入れにするなど、さらに工夫を重ねて完成させた。「設計から製作まで全て自分でできたのが、自信になりました」

3 人はこの春から、名古屋市や愛知県の教員として教壇に立つ。「授業をする上で、とてもいい経験になった。ものづくりの喜びを子どもたちに伝えていきたい」と今後の抱負を語った。

本学の案内看板完成(報告)



外来者に本学の場所を案内する看板が近くに伸びる県道沿いに、2 月半ばに設置された。

看板は県道 54 号沿い、「愛教大前」交差点から南北に 200 メートル離れた 2 カ所に建てられた。大きさは縦 0.8m、横 2.5m で、高さ 5.9m に設置。

以前から大学への道程が分かりにくいと学内外からの意見があり、昨年度に看板設置の計画が持ち上がったものの、設置予定場所の調査で水道などの配管が埋められているのが分かり、実施が延期されていた。今年度、新たに設置場所を決めて調査し、県の許可を得て、2 月 12 日に看板を設置し、14 日に道路の補修を行い、無事に完成した。

施設課職員は「設置までに時間がかかりましたが、看板が活用されて、本学への道も分かりやすくなりました」と話した。

大西衆院議員が本学を例に国会質問(報告)

2 月 25 日(金)の国会で、本学の事例が取り上げられた。衆議院予算委員会第四分科会で、大西健介衆院議員(民主党、愛知 13 区選出)が質問したもので、小学校を増設する地域がある中での 35 人学級の拡大、高校授業料無償化の運用上の問題点などについて文部科学省の高木義明大臣、鈴木寛副大臣の見解を求めた。

続いて大西議員は国立大学運営費交付金、特別支援教育への予算の配慮について質問。「私の地元に愛知教育大学があります。予算のほとんどが授業料と運営費交付金でこのカットは死活問題という声が上がっていました。教員養成系の単科大学は総合大学とは(運営費交付金で)違う配慮が必要ではないかと思います」と質問。鈴木副大臣は「大学改革促進係数の算定に当たって単科大学は下げ幅を少し減じることでまさに教員養成系の単科大学に配慮しています」と答弁した。

また、議員は「愛知教育大学附属特別支援学校を訪問して授業を見学し、話を聞いたことがありますが、施設が老朽化、教材費も苦しいと聞いた。教育系の大学で特別支援教育の免許を取るための養護学校がある場合何らかの加算があってもいいのではないかと思います」と関係予算の充実を要望する視点で質問。副大臣は「運営費交付金の特別経費による加算の取り組みはしています。額が十分かと言われれば、現場の負担を考えると気持ちとしてはもう少し拡充したいと思っており、必要な支援策に留意してまいりたい」と述べ、議員は副大臣から前向きな答弁を引き

出した。

大西健介衆院議員の話 鈴木副大臣は、教育大学特有の事情をきちんと理解されていると感じました。ただ、実行されるかが重要です。そこは、しっかりとフォローしていきたいと思います。「国づくりは人づくり」。優れた教員がいなければ「有為の人づくり」はできません。愛教大の皆様が誇りを持ってその責任を果たせるよう予算確保に努めてまいります。

展覧会など開催案内

◆「学生能への招待」展

3月17日(木)～4月22日(金) 入場無料

場所：附属図書館2階「アイ♥スペース」

*4月12日(火) 13(水) 12:40～13:00 には
本学能楽部による能の実演あり。

問い合わせ：附属図書館カウンター TEL0566-26-2687

休館日などは附属図書館ホームページ参照。

<http://www.auelib.aichi-edu.ac.jp/>



編集後記

東日本大震災で被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。言葉では言い尽くせない惨状の中で、多くの人たちが力を合わせて復興に向かって尽力する姿に心を打たれます。本学でも関係者の安否確認をした後、被災地の大学へ救援物資を届けたり、復興のための義援金を募ったり、ボランティアの募集をするなど、多数の教職員・学生が奔走しています。そんなことがあって、今号の発行が1週間遅くなってしまいましたことを、お詫びいたします。次号では、学内での被災地支援の動きもお伝えしたいと思います。ぜひ皆さんの、ご協力をお願いします。(K)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール：kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者：総務担当理事 折出 健二